

歴史的建造物の再建と観光事業・福島県会津若松市

～鶴ヶ城再建を例に～

本田 みのり

テーマを決めた動機

私は、幼いころに会津若松市内に住んでいたことがあり、特に市の観光名所である鶴ヶ城には何度も連れて行ってもらった思い出がある。また、私自身歴史ものが好きで、鶴ヶ城をはじめとした会津の歴史そのものに愛着がわくようになった。その中で私は、鶴ヶ城が江戸時代からのものではなく、昭和に入ってから再建されたものだということを知った。

そして今回、鶴ヶ城は解体から再建までにどのような道のりを歩んでいったのかを行政と関連付けて以下に述べていきたいと思う。

1. 鶴ヶ城の歴史（～戊辰戦争前）

◇ 中世～近世

1384年頃、蘆名氏7代目当主の蘆名直盛(あしな なおもり)が現在の地に館を建てたのが、鶴ヶ城の始まりといわれている。その後黒川城と名を変えて16世紀後半まで蘆名氏の居城として存在した。

しかし、1589年、伊達政宗が会津の地へ攻め入って蘆名氏を滅ぼし、黒川城を手に入れた。のちに豊臣秀吉によって会津そのものが召し上げられた。

1592年、蘆名氏に代わり蒲生氏郷(がもう うじさと)が黒川城へ入り、城郭をより立派なものへと改造し、城の名を「鶴ヶ城」とし、城下町を整備した。また、この頃氏郷はそれまで「黒川」であった町の名前を「若松」と改め、支配勢力をより強固なものにしていった。

その後は城主が何人も入れ替わり、たびたび改築や増築がなされていき17世紀初めには現在見られる層塔型天守となった。

1643年、徳川家光の親戚である保科正之(ほしな まさゆき)が入城し、その後明治維新まで、保科氏から改名した会津松平家の居城となった。

2. 戊辰戦争と天守閣の解体～戦前

1868年、戊辰戦争のさなか、幕府軍側であった会津藩でも戦争が起こり、鶴ヶ城も砲撃を受けるなど西軍の標的となった。戦争終結後は開城となり、当時の若松県の管理下に置かれることとなった。1873年、明治政府から「全国城郭存廃ノ処分並兵營地等撰定方(廢城令)」が出され、翌年には天守閣を含むすべての建物が解体または移築された。

その後、1890年には松平家に城郭地が払い下げられ、公園化の整備が進み、1920年代には所有権が当時の若松市に移り、1930年には国の史跡に指定された。

3. 再建前の鶴ヶ城本丸

第二次世界大戦後、鶴ヶ城本丸跡地に公営(県営)競輪場を建設した。競輪場でのレース競技が開催されたのは1950年から57年までの短い期間ではあったが、戦後の財政難対策の一環として行われたものであった。その後、競輪場自体は城外に移転し、1963年まで競技が続けられた。

4. 天守閣再建とその他の復元

建設の基金が集まり、市民の長年の思いが実って、1965年、鶴ヶ城天守閣は鉄筋コンクリート造りの外観復興天守として再建され、内部は鶴ヶ城の歴史や戊辰戦争の資料などを展示する郷土資料館として現在に至るまで利用されている。

その後、1990年には茶室「麟閣」が本丸に移築復元され、2001年には干飯櫓(ほしいやぐら)と南走長屋も続けて復元された。また、2010年から2011年にかけて、それまで黒であった城の屋根瓦を、幕末当時の赤い屋根瓦に葺き替えて復元する工事が行われた。

ちなみに赤瓦は、表面に釉薬(うわぐすり)が施してあるため、厳しい冬の寒さに耐えることができたといわれている。

5. 観光事業強化へ

2011年の東日本大震災以降、福島県、特に会津若松市を訪れる観光客が減少している。現在は回復してきているものの、震災前の観光客数には及んでいないというのが現状としてある。

会津若松市は、大河ドラマ「八重の桜」で会津藩が注目されたことを契機として、観光事業に力を入れている。周遊バスの運行や市街地の観光施設の充実化などが例として挙げられる。

また、2015年は鶴ヶ城天守閣の再建から50年を迎える記念の年でもあるため、市では50周年記念観光PR映像や記念事業ロゴマークの作成、記念式典、記念講演会、天守閣内郷土資料館リニューアルオープンなど、様々なイベントを開催している。これらを機とした観光客数のさらなる回復をねらいとしている。

これらを通して見えてくることは、訪れる観光客をより多くするためには、グッズ販売や記念イベントの開催につなげることのできる、何か大きなきっかけ(ドラマやCMの舞台など)や、江戸時代だけでなく、明治、大正時代あたりから現存する古い建物や資料を保存整備し、よりよく活用できるようにすることが、観光事業の強化に必要な要素であると思う。